

翻
刻

『稲葉
佳景
無駄
安留記』

八東
郡

- 一、私に句点、濁点を加える。原本のところどころに濁点を加えられているがそれらの区別はしない。
- 一、漢字・仮名とも、原則として現在通行の字体に統一する。
- 一、文字の大小の比率、配置は原本と異なる。
- 一、改行は原本のままとする。
- 一、絵とその題を四角の枠内に掲げる。配列は原本に従う。絵に書き加えられている説明のうちの主なものも枠内に記す。

八東郡

【下五二裏】

若桜今もあるじを忘れずて

散ればさながらゆきもりとなる

同 竹石 今竹市 是往古新興寺の境内なりし由。巖巖深

淵にかざしてさもおそろしき景色なり。

おそろしき虎の住べき竹石は

若さのじやより人もおぢけり

同 屯倉^{ミツクラ}弁財天巖 村より登ること 町余。幽谷に大巖在。

是神体なり。前に小秀倉を置。往古は諸人に器物を貸たまひし由。

うつくしきその御姿にならべては

みくらべられぬ岩の形かな

屯倉ハ推古十五年七月諸国ニ屯倉ヲ置ト。

同 諸鹿山美尾の飛泉

八東郡

同 峯寺薬師堂 宝来山慈性院持

衆眼病を祈て靈験あり。諸病を祈るなり。

峯寺や薬師の影は木々のめも

虫葉も共に癒るとぞ見る



八東郡

同 山崎算盤橋 往古は涉舟なりし。安政の年間若桜の

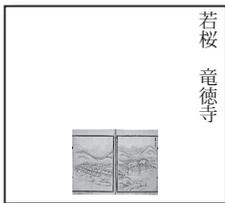
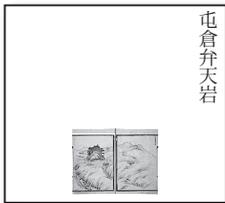
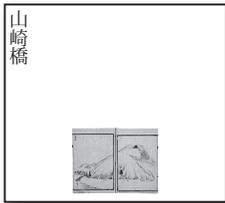
富民某、御許をかぶりて造ると

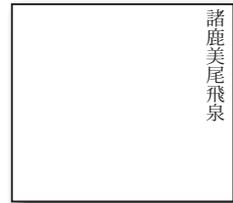
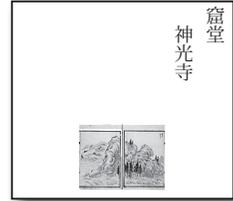
桁^ケ数はいくらあるかは白波の

上に掛たるそろばんのはし

同 若桜駅 竜徳寺 左馬頭行盛牌

若木桜





同 滝谷

同 次澄山中 不動巖 予想ふに是不動愛染

是巨勢金岡が画なりと。村より登ること凡十八町、峻阻を經て、横道を行て、生樹門をくゞり、岩をたどり、樹を挙りて、漸岩下に到る。仰ば岩巖の尖頭三所に朱色僅に残れり。星霜を經たる形、岩下を臨ば千仞の壁巖危く、脚もふるふばかり。向フを望ば、青嶂の間に飛泉登竜のごとく、絶景言語に尽がたく、なかく筆を投ずべし。

動かざる仏を岩に書置きて

きゆるもかたき金岡が筆

同 窟堂 妙見山神光寺 黒皮不動尊 空海三十三の作なり。

往古は大伽藍なりしが、天正の兵火に灰燼となる。今も堂の傍に、常峯院として修験是を守る。堂は飛驒工の作なり。

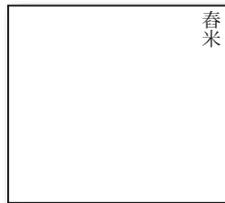
敦盛の墓、今は馬頭観音と云誤る。堂の側に祠あり。子安権現妙見宮は華門の内に鎮座。経盛一族の古墳は後園の小

同 落居 経盛内室の古墳 僅にしるし計残れる、あはれ

思きや散行花をかこちつゝ雪の深山に果ん物とは

高き処に在り。経盛田といふもあり。大同元草創なり。経盛の田は露けくも敦盛の

青葉ふきくる風は涼しな



同 姫路

同 春米権現

○蛇斬淵ジャキリフチ 八東郡糸白見村に在。矢部山城守若桜ワカサ在城ノ時、此淵フチに大蛇ジャスマ栖、人眼にも見へける由にて、彼侍臣ジシソレガシ 某之を斬らんと窺ウカマ事毎々ツネクなり。仍而コヘ高声に大蛇出よと呼はるに、水上に小蛇ヘビウカ游み行をも、刀にて胴切ドウにせしかば、忽ち大蛇となりて淵水フチ赫アケになり、浪立騒サワギけり。貞カタチち十四五丈有けると。其後白骨此辺に残り在りけるが、米春ツキウス白程ハクシロなるが路ミチ旁ノカタにタテ立て在り。往来人ニヨヒ 荷負ニヨヒながら腰コシをかける、休所ヤスミとなれり。後高麗カウライ陣コソの洪水コソに流ナガレ失ワセけりと云伝ふ。